

言語は世界を作る：インターネット交流における親子関係と学校言説に関するフォーコー派言説分析の視点から

瀬平劉, キャサリン

九州大学人間環境学府教育システム専攻：修士課程：教育方法学

<https://doi.org/10.15017/6786343>

出版情報：教育基礎学研究. 20, pp.19-34, 2023-03-25. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

言語は世界を作る

— インターネット交流における親子関係と学校言説に関する
フーコー派言説分析の視点から —

瀬平劉キャサリン

要旨

本稿では、フーコー派言説分析の実施例を通して、言語について、またアイデンティティと社会的世界を構築する過程について、社会構築主義の観点が我々の理解にいかに関与するかを検討する。本稿はフーコー派言説分析を用いて「Yahoo! 知恵袋」から引用した交流に見られる親子関係と学校に関するさまざまな言説について特定し、それらを検討する。言説はいかに参加者の行動、実践、主観性に影響を与えたのかも解明する。また、言説の様々な相互関係も究明し、これらの言説を取り上げることの意味、これらの言説から引き出される別の可能性、そして別の言説を取り上げる可能性についても検討する。

フーコー派言説分析 (FDA), 親子関係, 学校, 留年

序論

言語は日常生活に不可欠なものである。しかし、魚が水の中のように、我々は言語に浸っているからこそ、コミュニケーションをとることはどのようなことであるかは普段あまり考慮しない。言語を通じて、私たちはどのように制限されているか、同時にどのように力を与えられているかについてあまり着目しない。多くの場合、コミュニケーションを取ることは機械的に見えがちである。コミュニケーションは単に客観的に知られていることについての情報伝達としてしか考えられていない。しかし、社会構築主義は異なる視点を持っている。社会構築主義の観点では、言語はそれより力があり、対人的な目的を達成するための社会的行為だと見なされる。そのうえ、コミュニケーションをとる時に、様々な言説も駆使し、我々は自分自身と相手を構築し、我々の可能性を開いたり閉じたりもする。言語行為を通して、我々はアイデンティティと社会的世界を構築する。だが、その際、我々も同時に構築されたものに制約されている。

本稿の目的は、社会構築主義の特徴性、そして、その視点が含意しているものを解明することである。一つの交流の中でも、様々な言説があり、相互作用によって展開する。交流の場で言説が展開することによって、相手と自分も何らかの影響が与えられることも鮮やかに表す。それをより鮮明に描き出すために、本研究は社会構築主義という観点

に基づいているフーコー派言説分析 (Foucauldian Discourse Analysis; FDA) という言説分析アプローチを用いて、一つのインターネット交流における親に対する子どもの教育に巡る悩み相談を実施例として利用する。親子関係を持つことと学校に通うことは、ほとんどの人が共有する経験であるため、この交流を対象にする。

「言説とは何が、だれによって、どこで、いつ語られるかを促進したり制限したり、可能にしたり制約したりするものである」(Parker; Willig, 2008, p.112から引用) FDA は、言説に注目することによって、言語が社会生活や心理生活をいかに構成するかを見ることに関心を持つ。「方法」の節でより詳しくこのアプローチを取り上げる。「分析と成果」では、いかに様々な言説が一つの交流で展開しているか、そして、その展開により、いかに我々に権限が与えられたか、または、制限されたかを検討する。「考察」の節では分析による結果の示唆していることを議論し、同じ言説の別な取り上げ方を指摘する。

著者についての補足¹：私は中国系の家族から生まれたフィリピン出身の帰化日本人である。子供のころ、フィリピンと米国両国で育った。育てられた文化が華僑文化であるため、日本文化をある程度理解できる。しかし、多くの日本人より、西洋化された背景を持ち、経験した教育制度も米国制度に基づいているため、私の解釈が西洋文化から強い影響を受けている可能性がある。経験した教育制度は日本のような自動進級制度ではなく、成績評価に基づく進級制度を経験した。経験した教育制度では留年することに関して難色が見えつつも、留年することがより一般的であり、日本ほど非難されることがないと考えられる。最後に、私は子供を持っていないため、親の視点よりも子どもの観点により強く共鳴することができる。

方法

本稿は、社会構築主義の示すことをより具体的に見るため、FDA という言説分析を利用し、様々な親子関係と学校の言説を特定する。FDA を通じて、参加者がどのような言説を使い、それによって自らの状況、自分自身と他者の解釈をいかに形成するかがより明確に見られる。「言説」は「あらゆる形態の発話と書かれたもの」(Gilbert et al, Potter et al, 1987, p.6から引用) と定義することができるが、本研究では、「言説」を「はるかに広く、歴史的に発展しつつ、言語的実践」を指す(フーコー, Potter et al, 1987, p.7から引用)。

FDA はフランスの哲学者ミシェル・フーコーの思想から生まれた言説分析のアプローチである。FDA は、言説によって、どのような対象と主体が構築されているか、そして、構築されたことにより、どのようなあり方が可能になっているのかに焦点を合わせる。(ウィリッグ, 2001, p.124)

FDA は参加者の人格と信念に注目せず、ある事が実際に起こったかどうかにも注目しない。FDA は実証主義、または経験主義ではなく、社会構築主義から物事を見ているた

め、知覚を含む、「人間の経験が歴史的、文化的、言語的に媒介されるという事実に着目」（ウィリッグ, 2001, p.9）する。言説心理学（discursive psychology; DP）という他の種の言説分析は人々が社会的相互作用の中で、対人的な目的を達成するために、どのように言語を使用するかに着目するのに対し、FDAは言語と権力の関係に注目する。人々が利用できる言説資源は何か、いかにこの言説資源を使用しているか、そして、使用するにあたって、人間の経験と実践がいかに影響されているか、それらに着目する。

FDAの分析手順はまだ一つに統合されていないが、本稿は『心理学のための質的研究法入門』で紹介された6つの段階を扱う。特に社会学において、その6つの段階は広く使われるようになった。（Jen, 2019）その6つの段階が下記にある。（ウィリッグ, 2010, pp.150-153）

1. テキストにおける言説対象が構成される様々な様子を特定する（言説構成）
2. 言説構成を分類し、より広範な言説の中に位置付ける（言説）
3. 構築されたものはいかに使用するか、いかなる機能を持つか、いかに関連するかに焦点を当てる（行為志向性）
4. 言説の中に可能になっている主体の位置を細かく検討する（位置取り）
5. 言説と実践の関係を検討する。どの行為、または制度がより可能になっているか、または不可能になっているかを検討する（実践）
6. 様々な主体の位置において感じることを、考えること、経験されうること、を検討する（主体性）

以上の手順に従い、テキストを何度も読んで慣れ親しんだ後、原文をワード文書に移し、参照しやすいように行に番号を付けた。次に、親子関係と学校についての様々な言説がいかに構築されているかを確認するために、帰納法による分析を行った。言説構成を分類し、これらの言説が参加者によっていかに使用されているかを確認した。最後に、特定した言説が取り上げる際、関係者がいかに位置づけられ、いかなる実践が可能になっているか、または不可能になっているかを検討し、参加者の主観的体験にいかなる影響を与えているのかを素描した。

本稿はYahoo！知恵袋で拾えた一つのインターネット交流のみを検討する。抜粋は長さとし細かさにより選んだ。サンプルサイズは量的研究では足りないと思なされるが、言説分析を行う際には、サンプルサイズは通常においても多くはない。なぜなら、人数よりも言語がどのように使われているかに関心があるため、少数でも多くの言語パターンが浮かび上がってくると考えられるからである。（Potter et al, 1987, p.161）人数を制限することにより、テキストの意味と示唆していることがより掘り下げられ、関連付けられると考えられる。本研究の参加者の組み合わせた抜粋は合計91行（9,600文字）である。

行うべきデータ分析は単語を考慮するのみならず、特定した言説が作成された文脈も考慮する複雑なコーディングを行っている。

本稿は代表性に重点を置かない。母集団を代表できるかどうかではなく、いかなる言説が可能になり、見られるかに焦点を当てる。一般化を追求するよりも、言説の影響を受けている個人の経験をよりよく吟味したい。データソース、Yahoo! 知恵袋は広く使われ、無料で利用できることを考慮すれば、参加者は様々な言説を持っていると仮定し、本研究が多様な言説が見られることができると考えられる。本研究の目的とデータ分析の複雑さを考えれば、参加者の人数は十分だと考えられる。

インターネット倫理研究に準拠するため、参加者のハンドルネームを匿名とする。Yahoo! 知恵袋に登録する際、会員は本名を使わないことをサービスが推奨するため、参加者はすでに匿名化されているとも考えられる。追跡可能性を減らすために、本研究は原文の URL を提供しない。

成果

データの紹介

データは Yahoo! 知恵袋という知識共有兼検索サービスから抜粋された。利用する前に、利用者は登録する必要がある。登録する際、自分のハンドルネームを入力する必要がある。登録されたら、質問したい人は質問を残すことができ、回答したい人は返事をするすることができる。投稿時点で、自分のハンドルネームを非公開にするオプションもある。

読みやすさを促すように、本研究では、質問した方は A さん（女性）と表記し、回答した方は B さん（女性）と表記する。A さんと B さんは実際の投稿では性別を示していない。

A さんの発言

A さんは当時高校 1 年生で、留年するか退学するかの悩みを抱え、Yahoo! 知恵袋で意見を求めた。投稿の 3 行目に、「いろんな理由で二学期途中から学校へ行けてなく、親に散々迷惑をかけてしまいました」と認めている。出席は足りるものの、試験を受けたにも関わらず、点数が低すぎるため、留年することになったと A さんは続ける。留年してもまだ勉強したいと主張するが、母親がこれに反対すると語っていた。A さんは母親が A さんのことを自分に恥をかける存在とみなしていると考えていた。A さんは「もう高校いかんくていいから退学してくれない？ 親として恥ずかしいんだけど!!! お前なんて生きてる価値ない」（L6）と母親に言われたと語っていた。「もう、あんたの存在が恥ずかしいから家からでるな!!!」（L9）とも続けて言われたようだ。

だが、A さんは母親に抵抗し、「うるさいな、留年するって私がきめたん私ニートでも

いいんけっ??!」(L8)と言い返していた。Aさんは母娘関係が「殺し合う一歩手前位仲が悪い」(L13)と描写した。

Aさんはその後に父親についての話をした。他方、「父親は留年してでもなににしても高校は卒業しろ(省略)」(L16)と述べた。その父親の発言を聞き、高校で頑張ろうという気持ちと父親に対する感謝する気持ちが湧いてきたと述べている。だが、「母親は父親が留年させるのなら離婚と言っています」(L18)と他のYahoo!知恵袋の利用者に向けて共有した。Aさんは留年しても卒業したいとの願望を主張してから、第三者の意見も参考にしたいと語った。補足として、回答者に感謝を伝えると同時に、「私はほかの学校へ行くことや、中退という道は考えておりません」(L22-23)と言った。しかし、すぐその後に、自分が「最後まで続ける、努力ができない人」(L23)であるため、母親が娘を疑う理由が理解できると言い、回答者は様々な意見をもう少し検討すると伝えた。

Bさんの回答

Aさんの質問に対し、もっとも詳しく答えて、インターネット上でもっとも「ナイス!」を獲得した回答の一つはBさんからである。BさんはAさんと同じように学業が悪かった時期があったため、2学期から学校に行けなくなったと述べた。だが、復学でき、大学も卒業することができたを追加した。高校で留年したということは無駄ではないと言い、「あの経験がなければ、今の私はないと思います」(L32)と共有した後、すぐにどれくらいAさんが甘えているかを指摘し始めた。

Bさんが「まず、甘えているのだという現状を認識してください」(L33)とすぐに反省を促進し、学校に行かなければ、ニートになるのは「論外」で、「義務教育を修了している以上、学校に行かなければ、就職して当然なんです」(L35)と言った。だが、アルバイトの面接相手にされていなかった経験もその後に述べることを通じて、Bさんは仕事を見つけることがどれほど難しいかも示した。

Bさんは予測できる親の金銭的と社会的な負担を述べることを通じて、Aさんに様々な角度で決断を考えさせた。「不登校であっても学費は発生します。加えて、食費等の生活費、こうしてインターネットを使う遊興費など、あなたが今すぐ働きに出て1年稼いでも貯めることができない金額です」(L45-47)そして、「子育ての失敗は(中略)母親に責任があるものとして、お母様のことを嘆っていることでしょう」とも提起した。

「ご両親の説得、難しい」(L57)と言ったあと、Bさんは様々な助言をしている。「甘えさせてもらっていることへの感謝と、甘えてしまっていることへの謝罪をきちんと口にしてください」(L59)のほかに、ご両親に自分を証すように、わかりやすい目標を立て必ず達成することとAさんに忠告した。

同級生に留年することを最初から公開するという助言もし、助言の理由も述べた。そのことを隠した後に発見されたら、陰口やいじめに発展する可能性があると言った。

最後に、Aさんと周りの相違を指摘し、「こんなふうに、自分は周りとは違うのだと自覚したうえで、しっかりをご自分を向上させていってください」(L90)と言っている。

分析と成果

言説構成、言説、行為志向性

以上の相談がどのような言説世界を描いているか、それを理解するため、親関係に関する言説と学校に関する言説を特定し、ラベルをつける。この節の前半では親子関係がいかに関係され、後半では学校がいかに関係されているかということに焦点を当てる。FDAでは、言説のラベルは執筆者の文化的知識に依存しているため、研究者によって異なる場合もある。したがって、研究者はラベルを付けるが、それは何の価値判断も意味しない。言説を特定してから、参加者が対人目的を促進するように、特定されたさまざまな言説をいかに使用したかを検討する。

親子関係

Aさんの発言を分析し、3つの親子関係の言説：①封建的言説 ②戦闘的言説 ③自由主義言説 が見られる。

最初に現れた言説は封建的言説と共鳴し、親は領主であり、子どもは臣下に類似している。Aさんがどれほど両親に迷惑をかけたかという発言を通し、自分の状況が恥ずかしいことだと認識していることが示唆される。Aさんは「生きてる価値ない」と「(Aさんの)存在が恥ずかしい」というような母親の発言を通し、その封建的な言説が見られる。Aさんの抜粋にて、親が子どもに物事をやらせる権利があると強く示唆している。

Aさんはこの言説を認識しているが、深く内在化しているわけではないと考えられる。なぜならAさんはこの言説は三つの方法のみに使用していたと考えられるからだ。まず、「親に少々迷惑をかけてしまいました」(L3)や「親に迷惑かけてるのは充分わかっています」(L7)などという発言のようにAさんはこの言説を通し、読者に自分の行動の結果を自分も知っていることを認識させ、それは恥じるべきことも自分が分かっていることも示している。だが、その感情と恥じるべき理由についてあまり詳しく述べず、それについて一言しか言っていないことに留まる。無責任や自分の行動の結果をあまり意識していないというような批判の回避にこの言説を主に使っていると考えられる。次に、「親として恥ずかしいんだけど!!!お前なんて生きてる価値ない」(L6)や「あんたの存在が恥ずかしいから」(L9)のような発言を通し、Aさんはいかに母親がこの言説を使い、自分の子どもを攻めるかを詳しく述べている。Aさんはこの言説を母親に語らせることにより、そして、次の戦闘的言説の文脈の中にこの言説と抵抗することで、自分の反対する立場を明確にした。ですが、「一方父親は留年してでもなにでも高校は卒業しろ」(L15)で見られるように、ある時は、Aさんはこの言説を自分の主張した

いことを支持させることにも利用した。

2番目の見られる親子関係の言説は戦闘的言説だ。ある方は敵で、ある方は支持者だと描き出している。Aさんの両親の描き方でこの言説が見られる。Aさんは母親がどれほどけんか腰かを描写することで、母親の理不尽さを暗示した。「朝からかなり怒鳴り」(L5)で母親がどれほどうるさいか、そして、「もう、あんたの存在が恥ずかしいから家からでな!!!」(L9)という発言でみられるように、母親の発言に多くの感嘆符を付けることで、母親の強引と人を傷つける態度も描写した。「母親は父親が留年させるのなら離婚と言っています」(L18)とAさんが述べることで、母親の好戦的な態度はAさんにだけでなく父親にも対するものであることを示した。

対照的に、Aさんは父親が過剰な反応があるかどうかについて何も言わず、述べた父親の反応は「一方父親は留年してでもなにしても高校は卒業しろ。と言います。他の学校に行くなんてもってのほかだ」(L15-17)という発言のみである。それにより、父親の冷静さと威厳さを描写し、Aさんの側にはこのような人がいると読者に想起させる。その上、離婚の脅かしを述べることで、Aさんは父親が母親に脅かされることを表している。Aさん側に冷静と威厳のある方がいるにしても、脅かされていることが示唆されるため、読者の共感を喚起しうる。

Aさんの描写により、母親は好戦的、父親は冷静だとイメージできる。好戦的な態度は「不合理」だと関連しやすく、「冷静」は「合理性」と関連しやすいため、両親の対照的な態度を描写することで、読者の共感を喚起できると考えられる。この言説と先の封建的言説と合わせて両親の行為を描写することにより、読者がAさんの味方をする事が促される。

3番目の親子関係の言説は教育による保護が権利として扱われている言説である。この言説では親の子どもへの保護は義務だ。そして、その保護の義務の一つの側面は子どもを学校に行かせることだ。もし、その保護が与えられなかった場合、論争を起こすことができると考えられる。それは自由主義の言説と共鳴する。このような言説の中においては、個人は自由で、権利を持つ主体である存在として構築される。この言説は封建的言説に抵抗している。この言説の中では個人が個人として傷つけられたと見られる。母親の態度に対し、Aさんは自分のショックと怒りの感情を述べた。それに加え、「もちろんお母さんも傷ついてると思います」(L11)のように、母親を傷つけたことも認めた。「私は言い返してしました。「うるさいな、留年するって私がきめたん私ニートでもいいんけっ?!!」」(L8)でみられるように、この言説に子どもが親に抵抗することが許される。この言説を使うことにより、Aさんが自分の脆弱性を見せ、読者の共感を喚起することができる。戦闘的言説を使うことにより、この言説を強化した。同じ行で見られるように、Aさんが自分の主体性を表せることができた。そして、「でも、今ここでニートになってしまったらどうたら生活は嫌ですし、ましてや未来の自分の生活に支障

がでできます。(就職など)」(L11-12)で見られるように、自分の生き方の願望を持っている主体性もみせている。

次に、Bさんの発言に着目する。Bさんの返事に、もっとも目立っている言説は封建的言説である。Aさんの発言に対し、Bさんはより多くこの言説を使い、3つの使い方が見られる。使い方ごとに封建的言説の別の側面を見出すことができる。第一に、「改めて学校に行かせてほしいと両親に頭を下げました」(L38)で見られるように、この言説では、強い上下関係が見られる。Bさんが何回も母親を「お母様」と呼ぶことで、親子関係での強い上下関係を強調する。この両親は上位で、子どもが下位に位置する。「頭を下げる」はよく聞こえる表現だと考えられる、そして、「お母様」は通常でも他人の親のことを言う際には使われているので、Bさんは常識のマナーに沿えるようにその発言をしたと考えられる。しかし、そうした日本語の表現そのものが「封建性」を内部に持っている言語構造だとも言える。そのような表現を使うことにより、封建的な言説を強化したり、再認識させたり、再創造したりすることができると言える。

第二に、「多くの場合、子育ての失敗は（あなたがそう思わなくても、それが世間の評価です）母親に責任があるものとして、お母様のことを嗤っていることでしょう」(L52-53)で見られるように、この言説では子どもが両親（特に母親）の子育てに関する成功、または、失敗の指標として考えられている。Bさんの発言により、Aさんの行動のせいで母親が社会の非難を受ける対象に位置づけられることになる。これにより、BさんはAさんが両親にどれほど恥ずかしさを表すべき、感謝するべきかを強調した。

第三に、Bさんの発言ではこの言説における親と子どもの関係の性質が垣間見られる。Bさんはこの言説を用いることで、Aさんがどのように両親を納得させるかの具体的な助言を組み立て提供した。「甘えさせてもらっていることへの感謝と、甘えてしまっていることへの謝罪をきちんと口にしてください」(L59)で見られるように、こどもから親への謙虚と感謝が当たり前だということを表している。そして、「お母様が口で説得できないなら、行動と覚悟を見せるしかありません。あなたの学校生活での目標と退学届を一緒にお母様に預けて、説得しましょう」(L75-76)のように、比喩的に自分の人生を両親に預けることにより、子どもである自分の存在の価値を証明すべき下位にいる立場が明らかになった。

Bさんの発言ではAさんが使っていない言説が見られる。それは ④経済的な言説である。経済的言説では、子どもが経済的に価値があると証明できる限り、親が経済的に子どもを支援するという関係を構築する。経済的言説は封建的言説も強化するものとして利用される。なぜなら、金銭的に支援しているので、その主従のような上下関係を耐えなくてはならないと考えられる。封建的言説と似ているように、Bさんはこの言説を使い、AさんにAさんが甘えている状態を明らかにする。「高校はただではありません。不登校であっても学費は発生します。加えて、食費等の生活費、こうしてインターネット

トを使う遊興費など、あなたが今すぐ働きに出て1年稼いでも貯めることができない金額です」(L45-47)で見られるように、どれほどAさんが両親に負担をかけるかを表そうとした。

表1に抜粋が見られる親子関係の言説とそれらの言説構成を要約する。

表1. 親子関係の言説

親子関係の言説	言説構成
封建的言説	• 迷惑をかける関係 (L3) • 甘えを許す関係 (L3) • 恥をかく可能性のある関係 (L6, L9) • 強い上下関係 (L38) • 感謝を期待する関係 (L17, L57-59) • 信頼性を重んじる関係 (L64-71)
戦闘的言説	• 親子関係は戦場として描写する (L13) • 派閥、敵、または支持者がいる関係 (L5-9, L17)
自由主義言説	• 自由である、天性的な権利を持つ、主体性を持つ個人で構成される (L10-11) • 個人的な感情が可能である関係 (L10-11) • 反抗が可能である関係 (L8)
経済的な言説	• 支出と収入を計算する関係 (L45-47) • 封建的言説と絡んでいることがある

学校

Aさんの発言で見られた学校の言説は選抜と評価システムとしての学校の言説のみである。学校では様々な方法で個人を計る。その多様さは「出席日数は足りていたのですが赤点が多すぎて留年という形になりました。(一応テストは受けました)」(L4)で垣間見られる。「未来の自分の生活に支障がでできます。(就職など)」(L12)で見られるように、学校が自分の将来に影響を与えるという認識が示された。ただし、Aさんは自分が困っている状態を設定するために、この言説を取り上げたに過ぎないと考えられる。なぜなら、一回のみこの言説を使っていた上に、詳しくも言及されていないからである。自分の行動の結果を痛感していないとも考えられる。

それに対し、Bさんの発言では ①選抜と評価システムとしての学校 ②社会的舞台としての学校 ③通過儀礼としての学校 という3つの異なる言説が見られる。Aさんのように選抜と評価システムとしての学校も取り上げている。「進学校に入学したものの、勉強には全くついていけず、テストは最下位」(L28)で見られるように、学校が他人とついていけなければならない場所として構築されている。この言説を用いることで、Aさんとの類似性を示すことが可能となる。同じ行に、自分の失敗も公開すること

で、自分への信頼性も高めることができています。この言説の中では、学校が仕事の前段階であり、仕事からのモラトリウムであることが構築されたとと言える。「学校に行かなければ、就職して当然なんです」で見られるように、Bさんがこの言説の側面を用いることで、Aさんがどれほど甘えているかを主張した。「達成できなければその場で退学して就職するくらいの気で臨んでください」(L73)で見られるように、親子関係における封建的言説の中に、この言説を用いることで、Aさんが親の期待に応じられない場合、いかに行動するか、そして何を考えるべきかを指摘している。

Bさんの発言では社会的舞台としての学校も構築された。世間の期待に応えなければならない。そうでなければ、それに伴う結果を負うしかないと考えていることが、「周りには新入生、初対面がほとんどですから、隠すことはできます。ただ、隠し通すことは困難です」(L84-85)というこの発言で示された。そして、「多くの場合、子育ての失敗は(あなたがそう思わなくても、それが世間の評価です)母親に責任があるものとして、お母様のことを嗤っていることでしょう」(L52-53)で示すように、子どものみならず親、特に母親が社会的な判断の対象になる。こうして、BさんはAさんが学校の厳しさへの覚悟を促し、再度Aさんの甘えている考え方にも抵抗した。

Bさんの発言では通過儀礼としての学校の言説が見られる。この交流での儀礼は困難を克服し、いい成績または〇〇の資格を取れるようなことを指す。学校がこのように構築されることで、測る場として正当化される。「あの頃は真剣に悩んだんです。あの時私は一歩も前に進めなくなっていましたし、あの経験がなければ、今の私はないと思います」(L31-32)で見られるように、Bさんは自己成長のため、自分を鍛える学校、そしてそこで経験していたことの重要性を強調した。学校で何かを達成することにより、自分の成長を促し、人生を鍛えると示唆した。「頑張ろうと一度気合いが入ってもその時だけになってしまうなら、わかりやすい目標を立ててください。次のテストで赤点をなくす。〇教科以上平均点を取る。学年順位〇位以内に入る。英検〇級を取る。〇〇の資格を取る。など、身近であれば何でも構いませんし、達成困難なものである必要もありません。ただし、必ず達成してください」(L64-71)という発言で見られるように、親子関係における封建的言説の文脈の中にこの言説を使うことにより、Aさんがいかに両親を納得させるかの助言も構築した。この言説を取り上げることで、Aさんのこれから遭うであろう苦悩を正当化する。それと同時に、「あなたがきちんとした目標を持って努力している姿を見せられれば、きちんと認められることでしょう」(L88-89)のように、努力すればいつか認められると提起し、この言説を取り上げることにより、BさんがAさんを励ましていると考えられる。

表2に抜粋が見られる学校の言説とそれらの言説構成を要約する。

表2. 学校の言説

学校の言説	言説構成
選抜と評価システムとしての学校	• 様々な必要条件がある場。計る、順位をつける場 (L4, L28) • 並みを保つ場 (L28, L74) • 社会的承認を獲得する場 (L38) • 将来と未来（特に経済的）の地位に影響を与える場 (L12) • 職業の前段階、または、職業のモラトリアムの場 (L35)
社会的舞台としての学校	• 社会的な判断を受けられる場 (L52-53) • 世間体を取り繕う場 (L84)
通過儀礼としての学校	• 人格を鍛えられる、自己成長を促される厳しい場所 (L31-32, L23-24)

位置取り、実践、主体性

「言説の中の主体の位置によって、「権利や義務の構成の中での、そのレパートリーを用いる人々の位置」が特定される」(Davies and Harré, ウィリッグ, 2001, p.151から引用) この節で、各言説での主体の位置取り、そして、いかなる実践が可能になっているかを特定する。主体が何を感じられるか、考えられるか、経験できるかも検討する。

親子関係

封建的言説の中で、親は領主に位置付けられ、子どもは臣下に位置付けられた。ここでは、金銭的な側面も含み、親が子どもを保護する義務があることが示される。他人への責任が可能になる。Aさんの父親の描写で示唆されたように、それに伴う保護的な感情も生じる。だが、領主が臣下の資質で計られるとみなされるように、子どもの行動により、親が恥、または誇りを持つことが可能になっている。この言説の中で、特に子どもがふさわしくない場合、親が子供にすでに与えられた特権を取り返すことが可能になっている。したがって、親は寛大さ、または支配的な感情を感じることができる。

他方で、親が子どもに忠誠を求めることができ、親孝行が義務だと考えられている。親の思い通りに従わなければ、支持を切ることができる。「甘えさせてもらっていることへの感謝と、甘えてしまっていることへの謝罪をきちんと口にしてください」(L59)で示唆しているように、子どもが親に媚びる行動が求められる。その一方で、困難を乗り越えることで、子どもの価値を証明することも可能になる。物事をよく達成できれば、保護される、または甘やかすことが妥当になる。しかし、常に自分の価値を証明する必要があるため、子どもは不安を感じる、または主導権の欠如の感覚も引き起こすだろう。

この交流では、封建的言説が戦闘的言説を支持するために使用されることがある。戦闘的言説では、主体は敵、また支持者として位置される。攻める、交渉する、そして誰かを支持するような行為が可能になっている。Aさんの母親の描写のように、憎しみという感情も生じうる。だが、「父親のバックアップがあったからこそ頑張っ

校ですし…父親には感謝してると思ってます」(L17)という稀に封建的な言説を使用するAさんの発言で見られるように、子どもが力を貰える、エンパワーされるような感情も可能になっている。

自由主義な言説では、主体の位置取りが可能なのは権利を持っている個人である。この言説の中では、人が自分で決めることが可能になる。本来自分のものだと考えられるなら、「うるさいな、留年するって私がきめた(省略)」(L8)のように罪悪感なしに権利を守ろうとすることが可能になる。生得的だと思われる権利が奪われるなら、「ショックと怒りです」(L10)のように、傷つけられたこと、または憤慨も感じられる。

経済的言説の中では、親は投資家として、子どもが投資対象として位置づけられている。親が重荷を担うことが可能になっていると同時に、貪欲な感覚も許される。親が子どもの価値を高めるために、資源を子どもに与えることを許容する。投資に値がないと子どもが判定されたら、親は子どもに与えた資源を取り戻すことが可能になる。したがって、子どもは自分の価値が金銭的にしか測られないと感じられる。

学校

学校を選抜と評価システムとして扱うとすれば、学校の管理者は判定者に位置付けられ、生徒はどれほど活用できるか、またはどれほど条件を満たせるか、商品かのように品質が判定される。学校が門番になり、生徒が賃金労働に参入可能かどうかの決断者になる。正義と公平性を守るに伴う感情が可能になり、子どもへの厳しさも世間が許容する。封建的言説のように、子どもは文字通り「門下」に位置され、門の前に立たされ、自分の価値を証明し続けることが必要になる。子どもが、必要条件を満たせるかどうかに応じて、達成感、または挫折感が感じられる。ただし、物事をやり遂げたことに達成感を感じられる一方で、その過程でいかなる人間になっているかについての感情には着目されない。これも封建的言説と経済言説の絡み合いの表明だと言える。

学校が社会の舞台として構築されたとするなら、人間が俳優、監督、またはプロデューサーに位置づけられる。生徒が演技で評価される俳優になり、親および学校は生徒の総合的演技の良さで判断される。だが、参加者はそれぞれこのように位置されると同時に、全員が聴衆・オーディエンスにもなる。全員がお互い判断し合い、判断されたという感情が感じられる。おそらく、可能になる感情は決まり事を守ることに伴う感情、そして、世間体を気にすることに伴う恐怖、またはそれに失敗する恐怖であるだろう。この状況に立たせたら、開放感などの感覚が感じにくくなり、常に緊張感がありうると考えられる。

最後に、通過儀礼としての学校に触れる。決まった順位で試練を課すことにより、学校が自己成長を整える場として位置する。この言説の中に、生徒が入会者側、学校が伝授者・イニシエーター側に位置付けられる。自己成長と人格形成に繋がっているため、

学校側が生徒に過酷な試練を課せることを正当化する。そして、選抜と評価システムとして学校があるがゆえに、試練を課し終えた生徒は個人的な達成感、または一人前となった感覚を感じることができる。

考察

前節では、様々な言説を特定し、参加者がいかに特定した言説を使用したかを検討した。そして、いかなる実践、主観的経験が可能になっているかについても議論した。以下では、各言説をさらに掘り下げ、それらに伴う課題、相互関連、そして別のあり方も検討する。

親子関係における封建的言説では、同じようなポジションに位置された人物にもかかわらず、取り上げられる感情が異なることが印象的だと考えられる。父親と母親は同じように領主に位置しているが、この交流では、父親は保護意識がより安易に感じられ、母親は恥がより安易に感じられる。なぜある感情は片側のみに感じられるのかを考えさせられる。「多くの場合、子育ての失敗は（あなたがそう思わなくても、それが世間の評価です）母親に責任があるものとして、お母様のことを嘔っていることでしょう」（I52-53）という B さんの発言で示されるように、子育てに関して、母親に過剰な負担が掛けられていると考えられる。このような重荷が母親のみに負わせ続けるなら、母親の子どもへの保護意識にいかに関与を与えるのかを問わざるを得ない。このことはこの交流の特徴と言えるが、この現象は他の交流でも見られるという可能性があると考えられる。

自由主義言説が封建的言説を相殺すると考えられる。自由主義言説で自分の人生をいかに歩みたいかを選択できる感覚ができるようになり、主体性と自由が促される。権利を守るように、抵抗することもありうる。こうした考え方は現在の教育における子どもの権利に共鳴する。1985 ユネスコ学習権宣言では下記のように主張する：

学習権はたんなる経済発展の手段ではない。それは基本的権利の一つとしてとらえられなければならない。学習活動はあらゆる教育活動の中心に位置づけられ、人々を、なりゆきまかせの客体から、自らの歴史をつくる主体にかえていくものである。

しかしながら、この言説を使うことにより、ある種の孤独感も感じられると考えられる。極端に言えば、より自己中心的で、孤立しがちな人間が構築されやすくなるのではないか。自由主義言説が封建的言説を排除するより、いかに日常生活の中で適切に両立することが出来るかが課題になるだろう。

次に、学校の言説に注目する。これらの言説のもっとも目立っている特徴は判断の感覚だと考えられる。個人は経済的に、社会的に、または個人的に判断される。学校は経

済的あるいは社会的な地位を付けられるような資格を得られる場として構築されているため、そして、訓練を通し、社会に参入できることを証明することができるため、そこで過ごすことはやむを得ないことになるだろう。よって、学校は個人が選んでいない道に抑圧的に歩ませる場になりがちだと言える。この問題は社会学者 R. P. ドーアに指摘された。ドーアはこの問題を「学歴病」と呼び、「実際仕事に必要なとされていない知識獲得のための教育が増え続けている」(1980、筆者の和訳)と指摘した。学歴社会の現象がまだ残っている日本のように、学校の教育機能が社会選抜機能に取って代わるため、実用的に必要でなくても人間は学歴を偏重しがちになる。この文脈の中で、生徒が高い学歴を達するように圧力がかけられ、親ももっとも高い学歴を獲得する機会を子どもに与えるように圧力がかけられている。多くの教育は「不本意学習・入学」(reluctant schooling) になりうる (Dore, 1980)。その状況で生まれる多くの人間は、仕事や自己進歩に関して、競争的に外部の権力者の要求に適合するしかない人間だということが指摘されている (Dore, 1980)。

外からの圧力に強調する代わりに、努力に伴う自己達成感と自己成長を強調したら、いかに現象が変わるだろうか。判断と選抜から逃れることはできないが、外からの決定よりも、自己決定に集中しやすくなり、外部の基準のみならず自ら決めた基準も大事にできうと考えられる。だが、通過儀礼としての学校は訓練が生徒に課せられる。子供が大人になれるように、ある程度の訓練とそれに伴う苦労を経験されないといけないが、過剰な苦労が与えられるのも時に必要な訓練とともに正当化しうる。その場合、いじめ、または差別というような現象が許されがちである。学校の言説のこの側面に頼りすぎず留意が必要と考えられる。

通過儀礼としての学校と同時に新たな学校の言説が取り上げられたらどうなるだろうか。例として、Barbezat と Bush による『Contemplative Practices in Higher Education』(2014) で強調されている相互関係とケアを重視する言説が取りあげられる。他の国ではコミュニティとしての学校、または思いやりを育む場としての学校の言説が顕著である。それに反し、こうした言説は本研究の枠組みには見られなかった。コミュニティと思いやりを強調している言説が見つからないため、ケアに関する感情が生まれにくくなっていると考えられる。

終わりに

本稿では、FDA を用いて一つのインターネット交流を掘り下げた。それを通じて、社会構築主義の観点から、どれほど我々は言語にどっぷりと浸っているか、そして、我々の言説世界がどれほど豊富であるかが鮮明に見られた。たった一つの交流にしても、話し手は対人目的を達成するために、すでにいくつかの言説を利用することが明確だった。そして、既存の言説資源の豊富さにより、どれほど話し手の立場と位置が強化され

たか、また衰えたかも見られた。

本稿の分析を通じて、言説は単に固定したものではなく、どれほど力動的かも見られる。社会構築主義のポスト構造主義の性質が唱えるように、「言語のもつ意味は、決して固定されず、絶えず疑問にさらされていて、いつでも議論の余地があり、常に一時的である」(バー、1997, p.61)。言説は、本研究で見られた封建的言説と経済言説のように、時折、互いに協力し合う場合がある。時折、本研究で見られた自由主義言説と封建的言説のように、対立する場合も見られる。そして、いかに使用され、または、誰かに使用されることによって、言説のある側面は強調され、軽視されることもある。例えば、学校の様々な言説の特徴により、誰かに恥をかかせ、責任を負わせることに使えるのみならず、勧告を作り上げる、励ましとして使えることも見られた。その力動性があるからこそ、それぞれ違った目的を持っている話し手が同じ言説を違って使うことができる。そして、その違った使い方によって、それぞれ異なる実践とあり方も導くことが明らかになる。

言語は情報伝達手段としてだけではなく、潜んでいる力を持っている。言語を通じて、我々はアイデンティティを形成し続け、住んでいる世界も形成し続ける。我々は言説の使い手だが、それと同時に、言説はそれ自体生命もあると考えられる。言語を通じて、我々は自分自身と住んでいる世界を構築できるが、同時に、そして多くの場合、無意識的に、同じ手段によって、自分の考えられること、感じられること、そして行えることも制限される。

社会構築主義は一つの観点到過ぎないと考えられるが、それにしても、重要なことを指し示す。いかに言語を使って影響を与え合っているかについて熟考させられる。バーとバット(1993; バー、1995, p.230の引用)は、変化を起こすためには、「我々の主体性を現在形成している諸言説(およびそれらによってもたらされる諸立場)を認識する」必要があると主張する。それに導いて、我々はどの言説を使用しているかを認識した上で、いかにそれらの言説の様々な側面を違って使うことができるかも探究する必要があると考えられる。「ある言説の側面を別の側面よりも取り上げたら、何が変わってくるか」を問う必要がある。例えば、本稿では、学校における通過儀礼の言説の個人成長と達成を判断する側面よりも強調すれば、生徒たちの自己アイデンティティにいかに影響があるのかを検討できた。

また、既存の言説を支持するように、我々は無意識的に、他の言説を除外してしまう可能性について、我々が問う必要があると考えられる。本稿でケアの言説を特定するように、どの言説が今までに除外されたか、または、それを使うことにより、どのような新しい存在の側面が見出されるのかの検討が求める。

これらの間から与えられた課題に立ち向かう際に、もしかするとより私たちの望む生き方、せめてより多様性のある生き方が見出せるのではないかと考えられる。

〔注〕

- 1 質的研究では「反省性」が強調される。ウィリッグ（2001）の一つの提案に沿って、読者は研究者が研究のプロセスの中に意味の構成に寄与することを覚えさせるために、私の背景に関する補足を掲載した。

〔参考文献〕

- Barbezat, D. P. and Bush, M. (2014). *Contemplative practices in higher education: Powerful methods to transform teaching and learning*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- Dore, R. (1980) The diploma disease revisited. *IDS Bulletin* 11 (2).
- Jen, S. (2019) Ambivalence in labels, freedom in lives: Older women's discursive constructions of their bisexual identities. *Journal of Bisexuality* 19(3):1-28. DOI: 10. 1080/15299716. 2019. 1647908
- Potter, J. and Wetherell, M. (1987). *Discourse and social psychology: beyond attitudes and behavior*. Sage Publications, London.
- UNESCO Declaration on the recognition of the right to learn (1985). Paris, France
- Willig, C. (2008) *Introducing qualitative research in psychology* (2nd ed.). Open University Press.
- バー、ヴィヴィアン(著)田中一彦(訳)(1997)『社会的構造種への招待』川島書店
- ウィリッグ, C. (2001) 『心理学のための質的研究法入門』培風館